

Comprehensive support in the career development of to the special needs school high school students with symptoms of the Misofonia : Aiming to support students to increase self-affirmation and participate in society

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 雅義, 高橋, 美佐紀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00027945">https://doi.org/10.14945/00027945</a>

## ミソフォニア症状を有する特別支援学校高等部生徒の キャリア発達を促す包括的支援方法の開発

～自己肯定感を高め、社会参加できる支援を目指して～

鈴木雅義<sup>\*1</sup>、高橋美佐紀<sup>\*1</sup>

(静岡大学教育学部附属特別支援学校<sup>\*1</sup>)

### Comprehensive support in the career development of to the special needs school high school students with symptoms of the Misofonia

—Aiming to support students to increase self-affirmation and participate in  
society—

Suzuki Masayoshi<sup>\*1</sup>, Takahashi Misaki<sup>\*1</sup>.

#### 要旨

「知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校に在籍する児童生徒の増加の実態と教育的対応に関する研究」(国立特別支援教育総合研究所, 2011)によると、近年、知的障害特別支援学校高等部には特別支援学校の現状において、発達障害を併せ持つ生徒の在籍率が高くなってきている。また、発達障害に加え、感覚過敏や視覚聴覚過敏などを併せ持つ場合が多く確認されている。本研究では、こうした背景から、あまり理解されない見えづらい障害の部分に視点を当て考察する。感覚過敏であり、その中でも特定の音に対してのみ嫌悪感を示すミソフォニアについて整理を進め、支援方法を探る。

キーワード：ミソフォニア 音嫌悪症 発達障害 感覚過敏 支援方法

#### 1 緒言

知的障害特別支援学校をはじめ、特別支援学級、通常学級に在籍する知的障害、発達障害を含む障害のある児童生徒の多くは、集団での活動や行事に対する不安感や苦手意識をもっていることが多い。平成 29 年 3 月に出された「発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する教育支援体制整備ガイドライン」においてもこのことについて触れられている。また、今般の特別支援学校学習指導要領や特別支援教育の理念として、「障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである。」と支援方法について掲げられている。このことから、きめ細やかな実態把握から支援方法、支援体制について整える必要がある。

発達障害については、社会的な認知度が広まりを見せる中、具体的な関わり方や支援方法等、発達障害者

支援法をはじめ、各研究機関、教育機関で整理がされてきている。しかし現状では支援者が、「対人関係が築けない」「指示したことができない」等、発達障害に対する一般社会における理解が深まっていないことが明らかとなっている。また、発達障害においては、感覚過敏をもち合わせている傾向が強く、イヤーマフやサングラス等で刺激の軽減を図ることがあるが、支援者が何のために支援ツールを使用しているのか分からず、誤った関わり方を行っている事例が見られる。発達障害と感覚過敏について周りの人たちの関わり方、支援方法を整理、発信していくことで理解が進み、障害者にとって生活しやすい環境づくりにつながる。

特に聴覚過敏でミソフォニア症状を有する場合、日常の何気ない音に対して敏感になるため、周囲の理解がより必要となる。本研究実践校(知的障害特別支援学校)においても同様の症例が見られる生徒が在籍し、包括的支援方法の開発および支援体制を構築することが切望されている。本研究では、発達障害に加え、ミソフォニア(音嫌悪症)を有する生徒について、自身

での障害理解及び、自ら社会参加するための方策について研究し、包括的支援方法の開発とその検証を行う。なお、ミソフォニア症を有する児童生徒への指導について先行研究は報告されていないため、症状について海外の文献を整理する。

## 2 学習指導要領での位置づけ

特別支援学校学習指導要領・学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）（文部科学省，2019）には、以下のように記載されている。

「自閉症のある幼児児童生徒の場合、聴覚に過敏さが見られ、特定の音を嫌がることもある。そこで、自分で苦手な音などを知り、音源を遠ざけたり、イヤーマフやノイズキャンセルヘッドホン等の音量を調節する器具を利用したりするなどして、自分で対処できる方法を身に付けるように指導することが必要である。また、その特定の音が発生する理由や仕組みなどを理解し、徐々に受け入れられるように指導していくことも大切である。他にも、聴覚過敏のため、必要な音を聞き分けようとしても、周囲の音が重なり聞き分けづらい場合がある。こうした場合は、音量を調節する器具の利用等により、聞き取りやすさが向上し、物事に集中しやすくなることを学べるようにし、必要に応じて使い分けられるようにすることが大切である。加えて、状況に応じてこれらの器具を使用することを周囲に伝えることができるように指導することも大切である。」

下線は筆者による。学習指導要領においても、聴覚過敏に対しては支援・指導方法が示されているが、ミソフォニア症状については、記載されておらず、特定の音が苦手ということが伝わりにくさがある。トリガー音に対して怒りがこみあげてくるという周りに及ぼす影響を考えると、周囲の理解が最も必要となる。

## 3 研究の流れ

### 3-1 研究計画

#### (1) 文献、先行研究の整理

発達障害を有する生徒の生徒理解の方法について、実践や報告等を整理する。及びミソフォニア症状についての文献を整理し、先行研究をもとに実践や報告を整理しまとめる。

#### (2) 集団活動への参加方法について

学校生活の中で集団活動についての参加の方法について探り、集団生活への参加方法について、教員間で探る。

#### (3) 専門機関との連携

自己肯定感を高めるために大学や病院の専門家と連携し指導方法について考案する。

定期的に医療機関と連携をとる。

大学等調査研究機関と連携し対策を練る。

#### (4) アンケート調査

ミソフォニア症状について当事者に対してアンケート調査を行い、分析を図る。

### 3-2 実践方法

#### (1) 対処方法について

生徒自身の障害理解及び、対処方法について生徒とともに考案したり、提案したりして取り組む。

障害理解方法及び、対処方法について日々話し合いから考案し、実践する。

#### (2) 授業設計

将来の生活の展望を抱けるように、現在の生活と将来の生活において比較し、どのように生きていけばよいのかを探る。

職業科、作業学習等で実際の生活について触れたり、働く生活について比較できる場面を設定したりするなど授業研究を行う。

実態把握、計画、実践、評価、改善のR-PDCAサイクルで授業設計を行う。

#### (3) ミソフォニア症状について

ミソフォニア症状及び聴覚過敏の原因とその対処法について考案する。

ミソフォニア症状及び聴覚過敏となっている原因を調査する。

苦手な音や音域を調査する。

苦手な音や音域の対処方法を探る。

#### (4) 検証方法

実践の検証では、障害理解が進んだか。自己肯定感尺度アンケートへの記述から検証する。対処方法について実践したことにより活動に参加することができたか、日々の学校生活を記録し検証する。

将来の生活設計をすることができたか、また、どのように生活したらよいのか、授業の中から導き出すことができたかで検証する。

## 4 障害・症状について

### 4-1 発達障害と感覚過敏

水口（2020）の「自閉スペクトラム症児者の感覚過敏」によると、嗅覚過敏、聴覚過敏、触覚過敏、味覚過敏、視覚過敏、感覚過敏全般について症例を含め細かく論じられている。そして、次のようにまとめている。「特定の感覚器官から得た刺激や情報に対して、部分的な処理や細部に焦点化した処理を行う。その結果、特定の感覚に対する過敏が生じる。また、特定の感覚過敏が生起することで、他の感覚の鈍麻が生起する。」と述べられている。このことから、発達障害を有する児童生徒において何らかの過敏症をあわせもつことがあることを予想させる。

### 4-2 ミソフォニア（音嫌悪症）

#### (1) ミソフォニアの概要

ミソフォニア（Misophonia）は、特定の音に対して逃避願望や攻撃的衝動の伴う否定的な感情（嫌悪、怒

り、憎しみなど)が生じる症状をアメリカの神経学者である Pawel Jastreboff と Margaret Jastreboff らにより、ミソフォニアと名付けられた (2001)。そして、現在、耳鳴り、過敏症、ミソフォニアの新しい緩和方法を設計することを目的とした基礎科学と臨床研究が進められている。なお、選択的音感受性症候群とも訳される。また、音嫌悪症や音恐怖症と訳されている。現段階では、DSM-5 (精神障害の診断・統計マニュアル第5版) や ICD (国際疾病分類) には記載されておらず、日本においての診断は稀であるとまとめている。

Pawel Jastreboff と Margaret Jastreboff によると、原因は精神的というよりも神経学的と言われている。ミソフォニア症を有する人にとって、その音は決して容易に我慢できるようなものではなく、何度も音が繰り返されればその場から逃げ出したり、恐怖心すら覚えるものである。この特定の音をトリガー音、または、ミソフォニックサウンドと定義している。

トリガー音とは、まさしく引き金になる音である。その音には、咀嚼音、咳、咳払い、くしゃみなどの生理的に出される音やパソコンのタイピング音、シャープペンのノックオン、扉を閉める音など物から出される音がある。トリガー音は、人によって異なり、視覚的に嫌悪感を示すものがトリガー音と連動されていることがある。例えば、子供の泣き声や騒ぐ声が苦手な場合、音だけではなく、泣いている姿や騒いだりする姿にも嫌悪感を示すことがある。なお、トリガー音と連動していない場合でも、規範的な行動を破っている行動をとる者に対して嫌悪感を示す場合もある。例えば、整列しなくてはいけない場面で、並んでいない状態を見るとその姿を見た瞬間に怒り出すということも散見される。

Understanding and Overcoming Misophonia (Thomas Dozier, 2017)によると、ミソフォニアは、トリガー音が1回発生することによって嫌悪感を想起させる。トリガー音から逃れる方法としては、耳をふさいだり目をつぶったりすることであると記述されている。一部の人々は無力感や絶望感の極端な感情を抱くことにつながる。そして、「嫌いであり、苦手な音」に伴う非常に極端な感情をもつ。トリガー音を聞く経験は、刺激の感情的な反応によるものであり、トリガー音を知覚し、パブロフの条件反射のように筋肉に呼びかけるような反射があると述べている。こうした記述から、ミソフォニアは、トリガー音によって引き起こされる嫌悪感や恐怖心を抱くものではないかと推察することができる。また、トリガー音を聞くことで筋肉にまで影響を及ぼし、不随運動を伴うものであることがわかる。

図1のワードクラウド図は、Understanding and Overcoming Misophonia で頻出する言葉をまとめたものである。「感情」や「引き起こす」「筋肉」「刺

激」等の言葉が多く使用されていることがわかる。2014年、「Journal of Clinical Psychology」に発表された研究で20%にのぼる人がミソフォニアの影響を受けることが分かっている。また2015年、「オーストラレーシア精神医 (Australasian Psychiatry)」では強迫障害や不安症との関連が指摘され、潜在的にそれ自体精神障害とみなし得るとされている。

2017年にはイギリス・ニューカッスル大学の研究者を中心とするチームがミソフォニアで前頭葉に変化が生じることを明らかにした。音が引き起こす感情反応を説明できるようになっている。

## (2) ミソフォニアの診断基準

ミソフォニアの診断基準は確立されていないが、Understanding and Overcoming Misophonia には、いくつかの診断基準が示されている。表1に Understanding and Overcoming Misophonia に示されている診断基準の一つである MSA-1 を示す。

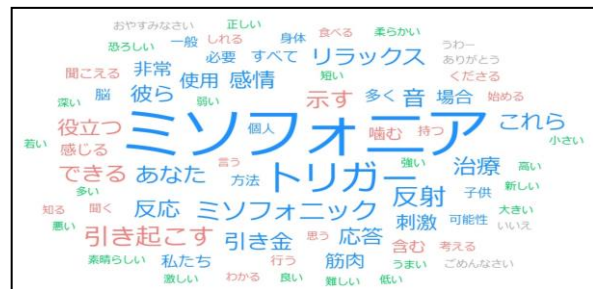


図1 Understanding and Overcoming Misophonia ワードクラウド図

表1 Understanding and Overcoming Misophonia MSA-1 診断基準

LV	診断基準	判定
0	既知のトリガー音は聞こえるが、不快感はない。	
1	既知のトリガー音を出す人の存在に気づいていますが、予期したことで不安はない、または、最小限。	
2	既知のトリガー音は、精神的不快感、刺激、または不快感を最小限に抑えます。パニックまたは攻撃または非行反応の症状はありません。	
3	精神的不快感のレベルが増加していると感じるが、身体的な反応はない状態。視聴覚刺激に対して非常に警戒している状態。	
4	最小限の身体的反応が起こる。非対決的な対処行動、トリガー音を発生させる人に騒音の発生を止めるように頼む、慎重に片方の耳を覆う、	

	または静かに騒音から離れる。パニックまたは逃避または非行の症状は見られない。	
5	耳をあからさまに覆う、トリガー音を模倣して発生させる人に対して、嫌悪感をもつ、過激な反応を示す。	
6	かなりの精神的不快感を経験する。パニックの症状、および攻撃または逃避反応が関与し始めます。	
7	かなりの精神的不快感を経験する。対立的対処メカニズムの使用の増加。性的興奮が表出される。苦手な音の経験後、数週間、さらには数年にわたって、トリガー音と視覚的手がかりを何度も再考する。	
8	トリガー音で、かなりの精神的不快感を感じる。暴力的な発言が増える。	
9	本格的なパニック/怒りの反応。トリガーとなる人に暴力をふるう寸前。トリガー音の近くからの実際の逃避および/器物破壊行動。パニック、怒り、または激しい刺激を、態度に現われる。	
10	人または動物（例：家庭用ペット）に対する暴力。暴力は自己に与えられる可能性がある（自傷行為）。	

### (3) ミソフォニアの調査より

#### (ア) アンケート調査の目的

日本でミソフォニア症状を有する方についての研究結果を示す資料がないため、一般の方でミソフォニア症状を有する方に対して行ったアンケートを図2、図3に示す。

#### (イ) アンケート方法

アンケート期間を、2020年7月4日から2020年8月4日までの1か月間に設定した。Twitterでミソフォニアアカウントを有する者を調査し、70名から回答が得られるように行った。

アンケート内容を①～④に示す。

#### ①ミソフォニアの症状について

「物心ついたときから」「途中から気づいた」

#### ②ミソフォニアについての理解者について

「周りにいる」「いない」

#### ③周りに同じようにミソフォニアの人がいる。または、同じような症状の人について

「いる」「いない」

#### ④トリガー音を聞いて嫌な気持ちになったり怖くなったり、怒るのは仕方がないと思っているについて

「はい」「いいえ」

以上の①から④について2者択一方式でTwitter上でアンケートを実施した。

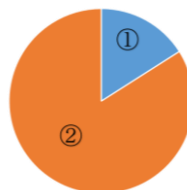
#### (ウ) アンケート結果と考察

①の発症についての質問では、大半である84%が「途中から気づいた」を選択している。ミソフォニア研究で明らかにされつつある途中で発現するという点について、実証できる材料の一つになるのではと考える。アンケート結果を図2に示す。

②のミソフォニアについての理解者については、64%が周りに理解者がいないことを選んでいる。目に見えない症状であることと認知されていないことが大きな要因であると思われる。一方で、34%が「いる」と答えている。全く理解されていないとされていたミソフォニアではあるが、少しずつ認知度が上がっているのではないかとすることを想起させてくれる。図3にアンケート結果を示す。

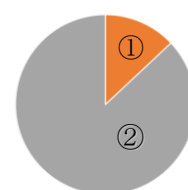
③の周りに同じ症状の人がいるかとの問いに対しては、87%がいないと回答している。見つけにくい症状であることをうかがうことができる。

④のトリガー音が聞こえたら怒ることは「仕方がない」としている方が70%を占めている。ミソフォニアを障害や症状として捉え、あきらめの気持ちが入り混じっていることを読み取ることができる。自由記述では、「音を出したやつが悪い」「あっちに行ってくれ」と本心では思っていないが、どうしても怒ってしまうとつらさを吐露した証言があった。



①物心ついた頃から ②途中から

図2 発症について



①いる ②いない

図3 周囲の理解者

### 5 事例生徒について

#### (1) 事例生徒の実態

##### (ア) 日常生活場面での実態

事例生徒に対する支援方法を構築するために、実態を示す。実態把握の項目を以下に示す。

#### ①「対人関係・社会性」の主に入との関わりやコミュニケーション面についての記述

#### ②「情緒面」には、気持ちの変化や対処法などを示した記述

#### ③「良い面」は、第三者から見た特に良い行動を記述。

表2には①～③について実態を示す。

表2 事例生徒の実態

① 対人関係・社会性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 予期しない事態に対応することが難しく、混乱し、大声を出すことがある。事前に予定を伝えたり、変更がある場合には、理由を話したりしている。</li> <li>・ 失敗や間違えたときに自分から報告することが難しく、イライラしやすいので、「どうしたの。」と教師が聞くことでイライラが軽減する。対処方法が分かっている。</li> <li>・ 慣れてない人や人達に対して警戒心をもち、不安な表情をしたり、攻撃的な表情になったりすることがある。</li> <li>・ 公共交通機関を利用して通学している。</li> <li>・ 自宅の近くのコンビニエンスストアに行き、好きなものを買ってくることができる。</li> <li>・ 休日には、一人で自転車に乗り、ショッピングセンターや書店等に出掛ける。</li> </ul>
② 情緒面	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 不安なことがあると安定せず、攻撃的な言葉や独り言が多くなる。</li> <li>・ 咳の音への恐怖から、イライラし、大声を出す、回避するための飛び出し、物を壊すなどの行動をとることがある。イライラしたら静かな場所に移動してクールダウンする。</li> <li>・ 学校行事やイベントが苦手なため、イベントや行事の参加の仕方を本人と教師、家庭で考えるようにしている。</li> <li>・ 初めての活動は、不安な様子を表し、イライラすることがある。事前に説明されたり、安心できる教師と一緒にいたりすることで、慣れて落ち着いて取り組む。</li> <li>・ パソコンで好きな動画を見ることを好む。</li> <li>・ 車や好きなキャラクターの絵を描くことを好む。</li> </ul>
③ 良い面	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 気持ちが安定しているときには、友達や教師に対して丁寧な言葉で対応することができる。</li> <li>・ 目標に対して力いっぱい頑張ろうとする姿が見られる。(頑張りすぎて疲れてしまい、イライラすることもある。)</li> </ul>

(イ) ミソフォニア診断基準より

事例生徒の様子からMSA-1に当てはめて考察した。高等部1年(2018.4月)では、トリガー音に対して嫌悪感を示し、激しい怒りと不安を表出し、器物の破損をしている。このため、レベル9相当と判断した。

高等部2年(2019.4月)では、トリガー音に対して嫌悪感や激しい怒りを表出するものの破壊行為まで至っていない。このためレベル8相当と判断した。

高等部3年(2020.4月)では、トリガー音を聞くと暴力的な言葉が継続されていることから、レベル8相当と判断した。

(2) 高等部3年での取り組み

①音に対しての支援

本生徒は、中学部より音に対しての過敏が強く、イヤーマフや耳栓を使用してきた。しかし、発汗を伴う作業や締め付けによる装着感など、学習場面によっては使用しづらいこともあり、不快感につながることもあった。また、これまで、不安感を感じた時には音楽プレイヤーをイヤーマフの中に入れて好きな音楽を聴いて過ごすことがあったが、教師や友達の声が聞き取りにくい、活動に参加できないといったことが問題であった。また、本来学習に必要なものとして学校に持ってこないよう本校のきまりで示されている音楽プレイヤーを授業中に使用することについて、他の生徒の理解を得ることも難しかった。そこで、授業中に音楽プレイヤーを使用することを前提とせず、様々な遮音できる機器を使い分けることで周囲と同じように終始活動に参加できることを目指したいと考えた。

本実践においては、「耳栓」「イヤーマフ」「デジタル耳栓」「AirPods」「ノイズキャンセルヘッドフォン」の5つの遮音できる機器を用意し、それぞれの機能について本人と共に確認した上で様々な場面で実際に使用した。その結果、本人へのインタビュー調査により使用感を星印の数(満点:☆5)で整理し、表3に示した。

やはり、これまで長年使用してきたイヤーマフが一番安心感が高いという感想だった。しかし、ノイズキャンセル機能を備えたイヤホンやヘッドフォンについてもその性能の良さを実感できた様子であり、作業

表3 遮音機器インタビュー調査結果(満点:☆5)

器具	遮音性	快適さ	安心感	見た目	価格	適した場面
耳栓	☆☆	☆☆☆☆	☆☆	☆☆☆☆☆	☆☆☆☆	室外作業 室外体育
イヤーマフ	☆☆☆	☆☆	☆☆☆	☆☆☆	☆☆☆	バス、教室 人が多い、人前に入る
デジタル耳栓	☆☆	☆☆	☆☆	☆☆☆	☆☆☆☆	室外作業
AirPods	☆☆☆	☆☆☆☆	☆☆☆	☆☆☆☆	☆☆	作業学習(室内、室外)
ヘッドフォン	☆☆☆	☆☆☆	☆☆☆	☆☆☆☆	☆☆	教室

学習の時にはAirPodsは指示が聞きやすく良い、登下校にはイヤーマフが安心できて良い、と使い分けを行い、耳栓、イヤーマフ、AirPodsの3つがあれば生活全般を網羅できることが分かった。

## ②情動の調整

本生徒は、日常生活、学校生活においてつまづきを感じた時に理由を問うと、「咳が気になる。」と述べる傾向にあった。ただし、その段階で咳の音が聞こえていない場合も多く、「咳が聞こえるかもしれない。」という理由に帰る場合も多々あった。そこで、全て咳の音が起因していないのではないかと仮定し、そのほかの原因について本人と一緒に探ることとした。

まず、普段の生活の中で問題とされる「暴言」と、社会的に許容されるであろう「独り言」について、その内容や話し方に視点を置き、本人とともに整理をした。日頃の発言の内容を記録して本人に提示し、周囲に不快な感情を与えるものとそうでないものに分類させた。その結果、特定の個人名が出る話題、「ぶっ倒してやる」「ぶっ殺してやる」などの暴力的な発言、場にそぐわない大きな声での発言を暴言とし、公の場での発言としてふさわしくないものと理解できるように促した。それ以外の、車の話やアニメの話題などは社会的に他人を傷つけるものではないとし、発言しても良い話題だと整理した。ただし、自分の話を聞いてほしいときは独り言を言うのではなく、自分から教師や友達にきちんと話し掛けることが社会的にはふさわしいコミュニケーションであると確認した。

続いて、暴言の内容について精査した。本生徒が突発的に暴言が出てしまったり、大きな声で独り言を言ったりする場面では、どのような内容の発言が多いかを調べると、「運動会のとき〇〇だった」「〇年生のときの文化祭で〇〇」「現場実習（産業現場等における実習）で〇〇」といった、過去の自身の失敗や教師に注意を受けた場面について話題にしていることが多かった。そこで、本人からそのひとつひとつの内容を聞き取り精査すると、そのほとんどが咳に起因した失敗ではないことが多く分かった。その事実を本人に伝え、不安感の要因が咳の音だけではなく、別の要因に起因する過去の失敗から不安感が募り、暴言につながっていることを本人が理解することができた。

## ③学習場面

### ③-1 作業学習

作業学習での場面について記述する。本生徒は、農園芸班に所属し活動している。

農園の隣地にある幼稚園の子どもの声に苦手意識がある。これまで、幼児が大きな声を出すと幼児や保護者に対して攻撃的な発言をすることもあった。そこで、作業学習でのリーダーを任せ、作業中には後輩の相談に乗ったり、後輩に指示を出したりする機会を作ることによって必然的に、注意力が作業に関する会話に向き、幼

児の声に注意が向かなくなった。幼児の降園の時刻などに作業学習が重なると、幼児の声が聞こえる場面もあるが、それに対して怒りの感情を出すこともなく、作業を遂行することができるようになった。本人の感想にも、「作業に集中することができて良かった。」

「今日は目標の作業まで終わることができてうれしかった。次回はネギの収穫までやりたい。」と自己肯定感の高まりをうかがうことができた。

### ③-2 行事（運動会）

本生徒は、行事に対して苦手意識があり、昨年度まで運動会参加について強いこだわりを示していた。

本年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため、実施できなかった。本人が運動会の話題を出すたびに、今後、社会人になると運動会へ参加しなくても良いことを伝えた。昔のことにこだわらず、これからのことを考えるようにとアドバイスすると、運動会に関する発言が少なくなった。

### ③-3 産業現場等における実習（現場実習）

本生徒は、現場実習において強い不安感があり、高等部入学時より期間を調整したり、実習先に対応策を共有したりして取り組んできた経過がある。

本人、保護者共に、昨年度同様、時間を短縮した上での産業現場等における実習を希望していたが、その経験自体が「クラスメートと同じように実習ができなかった」という失敗の経験として暴言につながるがあった。そこで、今年度は他のクラスメートと同じ状況での成功体験を目指し、支援を行った。本人、保護者が揃った3者面談において、3年時における現場実習の意味を伝え、時間短縮はできないこと、時間短縮しなくてもやり遂げられる実力が付いていることを伝えた。時間や期間の短縮を前提に考えず、フルタイムで働くことを前提にし、「2年生のときよりも実力があるから大丈夫」と励まし続けることで、本生徒は現場実習をやり遂げ、大きな自信をつけて学校生活に戻ることができた。

### ④教師間の共通理解

応用行動分析学を参考に、暴言が出た場合の対応を教員間で共通理解した。これまで、暴言が出ると別室に行き、教師が不安感を聞き取る支援を行ってきたが、暴言が集団での活動に対する「回避行動」とであると仮定すると、「その授業に出たくない」という本人の要求が成功することとなる。また、「注目行動」と考えると、教師と1対1での話し合いもまた、本人の要求が成功することとなる。今後の社会生活を考えると、あくまで集団活動に参加するという前提で活動し、どういう支援があれば不安なく活動できるかを探っていくべきである。「回避」や「注目」への要求行動として暴言が定着することを避けるために、以下のように実践を行った。

ターゲットとなる話題を決め、その話題に対しては

教師が無反応とすることにした。同時に、静かに過ごしている場合や適切な内容を適切な方法で話し掛けに来た場合は、十分に関わることとした。

⑤保護者との関わりについて

本生徒は、家庭内で孤立気味であり、大きな声で独り言を言うことに対して家族から「うるさい」と注意を受けることがしばしばある。本人の気持ちとしては、「学校であったことを聞いてもらいたい。」「頑張ったことを聞いてもらいたい。」などが主であるが、そのための手段として卑猥な言葉や学校での失敗を大きな声の独り言で言い、注目行動を起こしていることが分かった。母親の意見としては、「良いことも報告したいのは分かるが、ほぼ不適切な内容の独り言から、良い内容を拾い出すのは難しく、結果として全てを『うるさい』としてしまっている」とのことだった。そこで、親子での交換日記を提案した。学校で起こった楽しかったこと、嬉しかったこと、頑張ったことなどポジティブな内容のみを書くよう本人に伝え、それに対して母親からコメントをもらうようにした。

本生徒は、母親から返事をもらえることを励みに、毎日昼休みに午前中の自分の行動をポジティブに振り返った。昼休みにこの活動を取り入れることで、結果として独り言を言う物理的時間が少なくなり、自席で落ち着いて過ごすことができた。また、失敗したことを振り返るのではなく、成功したことを文字化することで、気持ちが落ち着き、午後の活動がうまくいくようになった。家庭においては、この日記を書き始めてから大声での独り言による注目行動が激減したとの報

告を受けた。その日の成功体験に話題を焦点化し、親子で落ち着いて話をするようになったということである。母親は「こんなに頑張っていることをこれまできちんと聞いてやれなかったことが申し訳ない。思った以上に頑張っていることを知った。」という感想を述べていた。

⑥自己肯定感アンケート結果より

桜井(2000)の自尊感情尺度を基に本生徒に対して回答可能な自己肯定感尺度を考案した。2020年6月と12月に自己肯定感尺度のアンケート調査を実施した。アンケート項目について、「4. とてもそう思う」「3. そう思う」「2. そう思わない」「1. 全くそう思わない」の4件法で行った。以上の4件に加え、自由記述欄を設けた。アンケート結果を表4、表5に示す。

結果から、質問1、3、4、7、8、10の項目において否定的になっていることがわかる。対して、質問6は、ポイントが上がっている。数字のみで考えると自己肯定感を支える質問項目について低下していることが伺える。このことについて本人の背景や発言を6月の記録からみると、友達を意識する発言について支配的であったり、嘲笑したりする態度があった。いわば、自分は強い存在で周りの人間は大したことないと考えている様子があった。つまり、周りの評価を落とすことで自らを肯定していたのではないかと考える。それは、11月実施の最後の実習の場面で聞かれた言葉で推測することができる。「〇〇君は、俺よりも頑張っていたからな。」「〇〇君は、力つけたもん

表4 自己肯定感アンケート結果(2020年6月・12月)

		2020 6月	2020 12月
1	あなたは、自分のことが好きだと思いますか。	4	2
2	あなたは、今の自分で良いと思いますか。	1	1
3	あなたは、自分をダメな人間だと思うことがありますか。	3	4
4	あなたは、友達よりも勝っていると思いますか。	3	1
5	あなたは、得意なことがあると思いますか。	2	2
6	あなたは、人の役に立っていると思いますか。	2	3
7	あなたは、周りから大切にされていると思いますか。	3	1
8	あなたは、周りの人と同じくらい大切にされていると思いますか。	3	1
9	あなたは、失敗することは嫌ですか。	4	4
10	あなたは、頑張ろうという気持ちをもっていると思いますか。	3	2

表5 自己肯定感アンケート自由記述(2020年6月・12月)

2020年 6月	2020年 12月
私は、性格が悪く気持ち悪い発言をしていて、子供に対して全く愛想がない人間だと思います。現在、咳や騒ぎ声が苦手なため、イヤーマフ、耳栓、イヤホンの3つを使い分けて生活しています。そうすると自分は楽になれます。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人にはあまり優しくできない。</li> <li>・自分ばっか甘えてしまう。</li> <li>・人を差別する発言をたまに言ってしまう。</li> <li>・乗っている車で人の人生が決まると思っている。</li> </ul> 相手が望んでいないことを言ってしまう。



な。」と友達を認める発言を聞くことができた。こうしたことにより、周りの友達に対する気持ちの変化があったことにより、本生徒の自己理解が進んだ結果だといえる。従って、質問6の自分が役に立っているかという問いには、自分発信になるのでポイントが上がったのではないかと推察できる。

表5の自由記述からは、6月には、ミソフォニア症状を呈していた咳や騒ぎ声の記述があるのに対して、12月には、トリガー音の文言が消えている。苦手な音に対する支援、遮音機器の効果的な使用の他、周りの協力による包括的な支援が功を奏したことは言うまでもないことである。

ミソフォニア診断基準に当てはめると、音に対して以前に比べ反応が減少したことや暴言がなくなったことから、レベル4相当が適当ではないかと判断する。

## 6 考察

### (1) 実践の検証

本実践は、ミソフォニア症状を有する生徒に対してキャリア発達を促しながら、機器の使用による自己支援、周りの関係する人的な支援、そして、進路先の福祉事業所という次の進路に対する関係者も含め、包括的な支援を行えるように実践をしてきた。本生徒の自己理解ができるように支援体制を組み取り組んできた。

ミソフォニア症状については、症状を有する方々へのアンケート結果から、まだ認知されていない症状であり、苦しんでいる方が多く存在することがわかり、対処方法についても症例によっては大きく異なることが分かった。本生徒の場合は、ミソフォニア症状に対して、遮音機器の使い分けという自己支援することができるようになったことと、そのほかの活動によって軽減されたことにより、症状の発出が減少していった。今後の生活においても役立ててほしいと考える。

高等部3年の実践では、回避行動と注目行動の分析を丁寧に行ったことや、担任、学部で同じ手段を用いたことで問題行動の軽減につながった。共通理解をしながら支援を行うことができたために生み出された結果であろう。保護者への支援についても言及し、協力を得ながら進められたことは、卒業後の家庭生活においても機能するのではないかと考える。

### (2) 成果と課題

本実践の成果としては、ミソフォニアというあまり知られていない症状を調査したことで、感覚過敏においても様々な症状があったり、理解されにくい症状を明らかにしたりすることができた。そして、その支援体制について構築することで問題の解決につながったと考える。

課題としては、自己肯定感尺度を用いたアンケート結果から分かるように、自己理解と自己肯定感のバランスにあると考える。アンケート結果に示したように、

自己理解が進んだ状態であるのに対して自己肯定感は低くなった。自分と係る環境との関係性から自己肯定感が低下したわけだが、自己の気づきがあったことは生徒に良いことだと伝える一方でどんな意味があるのかを日々話しておく必要があったのではないかと考える。日常の生活の中で即時評価し、意味づけ、価値づけしていくことの重要性が再確認された。

## 7 倫理的配慮

ミソフォニアの調査については本研究の目的と内容、プライバシーポリシーを明記した。調査票の回収をもって調査協力への同意を得たものとした。

事例生徒については、対象者の家族に、口頭にて調査結果の利用方法やプライバシー保護に配慮する旨説明を行い、書面にて同意を取得した。

## 引用・参考文献

- Dozier, Thomas H (2017) Understanding and Overcoming Misophonia, 2nd Edition
- Jennifer J. Brout et al (2018) Investigating Misophonia: A Review of the Empirical Literature, Clinical Implication, and a Research Agenda. Front Neurosci. 12: 36, 2018
- Sukhbinder Kumar. (2017) The Brain Basis for Misophonia. current Biology
- Christie Lang and Margaret A. Miklancie (2015) Tools to Offer TLC for Hatred of Sound. Neurology Times 10, 2015
- 桜井茂男 (2000) ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 Bulletin 01 Tsulcuba Develo 戸 mentaland Clinical Psychology, vol.12 2000
- 水口 崇 (2020) 自閉スペクトラム症児者の感覚過敏：状態像と諸理論 信州心理臨床紀要. 19:175-191
- 本田秀夫・日戸由刈 (2013) アスペルガー症候群のある子どものための新キャリア教育
- 熊谷高幸 (2017) 自閉症と感覚過敏 新曜社
- 栗本啓司 (2018) 感覚過敏は治りますか? 花風社
- 国立特別支援教育総合研究所 (2011) 知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校に在籍する児童生徒の増加の実態と教育的対応に関する研究
- 文部科学省 (2017) 発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する教育支援体制整備ガイドライン (参考資料)
- 文部科学省 (2019) 特別支援学校学習指導要領・学習指導要領解説 自立活動編 (幼稚部・小学部・中学部)

本研究は、日本科学協会の笹川科学研究助成による助成を受けたものです。